2015.12 外務省招聘による元アメリカ兵捕虜第 2 陣の来日

2015 年 12 月 6 日～14 日

12 月 6 日～14 日、日本政府の招聘で、元アメリカ兵捕虜の第 1 陣(元捕虜 5 人+付添 5 人)が来日しました。当初は 9 人の予定でしたが、1 人は 10 月グループに繰り上げられ、3 人は体調が悪くて来日が叶いませんでした。全員が日本本土周辺で撃墜されて捕虜になった飛行士たちです。これまでの来日グループにも元飛行士が加わっていたことがありましたが、今回のように団体で来日したのは初めてです。彼らは、無差別爆撃を行った犯罪人とみなされ、正規の捕虜の扱いを受けることができず、より劣悪な環境に置かれました。

ちょうど同じ時期にカナダの捕虜家族のグループが来日したため、POW 研究会、「元捕虜・家族と交流する会」による交流会を開くことができず、代わりに明治学院大学横浜キャンパスで行ってもらい、そこに P 研メンバーが参加する形になりました。また何人かは墜落地や収容所跡地訪問に同行したり、現地での交流会に参加しました。

＜来日した方々のプロフィール＞

ウィリアム・コネル (William L. Connell)

ミネソタ州在住の 91 歳。米海軍に入隊。小笠原諸島父島に空母ホーネット艦載機が墜落。当時，海軍中尉だったコネル氏はパラシュートで脱出し，捕虜となる。大船海軍収容所を経て，1945 年 5 月，大森収容所に送られる。戦後は 23 年間保険会社に勤務。またその後 11 年間ミネソタ州のゴルフ・クラブに勤めた。かつて墜落した父島に，何度か訪問した事あり。

フィスク・ハンレー (Fiske Hanley II)

テキサス州在住の 95 歳。米陸軍航空軍に所属。1945 年 3 月，現在の福岡県直方市の中島橋下流に搭乗していた B29 が墜落。機関士だった同氏はパラシュート降下して捕虜になる。飯塚警察署から西部軍司令部を経て，東京憲兵隊，大森収容所に収容された。戦後はエンジニアとして，現在のロッキード・マーチン社に勤務。捕虜体験についての回想記『Accused American: War Criminal』を出版。

チャールズ・ブラウン　(Charles H. Brown)

ウェスト・バージニア州在住の 91 歳。米海軍に所属。1945 年 2 月，現在の茨城県土浦市の霞ヶ浦西端に墜落。当時，海軍少尉だった同氏はゴムボートで脱出して捕虜となり，霞ヶ浦海軍基地から大船捕虜収容所に送られた後，大森捕虜収容所に収容された。戦後，弁護士として 50 年間務める。

スコット・ダウニング (Scott M. Downing)

テキサス州在住の 96 歳。米空軍の第 313 航空団 505 爆撃軍に所属。1945 年 5 月，現在の千葉県印西市の田んぼに搭乗していたＢ２９が墜落。同氏は，仲間の 7 人と共にパラシュート降下して捕虜となる。東京憲兵隊に送られた。戦後も空軍に残り，GHQ の法務局調査部にも勤務。退役後は兄弟と共に建設業に従事。

ドナルド・ライアン (Donald E. Ryan)

フロリダ州在住の 93 歳。1945 年 5 月，現在の埼玉県三郷市の田んぼに，搭乗していた B29 が墜落。同氏は仲間と共にパラシュート降下し捕虜となる。東京憲兵隊，その後大森収容所に送られた。戦後，トラックのリース事業に従事。

＜おもな日程＞

12 月 6 日（日）　成田着
　　7 日（月）　英連邦戦死者墓地訪問，大船収容所跡など訪問，明治学院大学学生との交流会
　　8 日（火）　米国大使館ケネディー大使を訪問
　　9 日（水）　外務省、東京憲兵隊跡、大森収容所跡、東京大空襲戦災資料センターなど訪問
　　10 日（木）　地方の墜落地点など訪問，市民との交流会　（茨城/群馬・埼玉・千葉/福岡）
　　11 日（金）　地方の墜落地点など訪問→京都へ移動
　　12 日（土）　京都観光など
　　13 日（日）　京都霊山観音，立命館大学国際平和ミュージアムなど訪問
　　14 日（月）　関西空港発

＜地方訪問先＞

① 茨城グループ（チャールズ・ブラウンさん、ウィリアム・コネルさん）
② 群馬・埼玉・千葉グループ（スコット・ダウニングさん、ドナルド・ライアンさん）
③ 福岡グループ（フィスク・ハンレーさん）

＜フォトアルバム＞

12/7　大船収容所そばの龍宝寺にて、当時を知る近隣住民と交流（中央はチャールズ・ブラウンさん）

12/7　明治学院大学横浜キャンパスにて、学生たちに体験を語る元飛行士 5 人。P 研メンバーも参加。

12/8　国際 IC 議連（超党派の国会議員グループ）との交流会

12/9　東京大空襲戦災資料センターにて、空襲被害者とフィスク・ハンレーさん（伊吹由歌子さん提供）

12/10　ブラウンさんが撃墜された茨城県霞ケ浦にて。予科練平和祈念館調査員（左）、藤田議員(その右)の説明を受けるブラウンさん(中央)。（藤田幸久議員のブログより）

12/11　ダウニングさん(左)が撃墜された千葉県印西市での市民交流会。ダウニングさんを木に縛った住民の孫と握手。（新井勲さん提供）

（記録：笹本妙子）

＊＊＊

明治学院大学横浜キャンパスでの交流記録

2015 年 12 月 7 日（月）夕刻

クリスマスのイルミネーションの輝く明治学院キャンパスは広く、5 時にはすでに夕闇が迫っているにもかかわらず学生で賑やかだった。バスを降りた元捕虜や家族、私たちＰ研のメンバー（ここで高田さん、西里さん合流）は学生をかき分けるように校舎に入り、会場の教室に向かった。この交流会は、ジョン・キム先生のクラスの学生を中心に、呼びかけに応えて集まった学生が参加した模様だった。絨毯を敷いた椅子の無い階段状の教室に、80 名ぐらいの学生がひしめき合って座っていた。中には留学生らしい学生も何人もいた。教室最前部には、参加者からはやや見下ろすような位置に証言者席が作ってあった。元捕虜の皆さんが並んで着席し、キム先生の司会、塚田あゆみさんの通訳で交流会が始まった。まず元捕虜の方々が自己紹介と捕虜体験を語った。

＜元捕虜の証言＞

１）ロナルド・ライアン（Donald Ryan）

1945 年 5 月午後 2 時頃、パラシュートで搭乗したＢ29 から降下すると、6 人の女学生と兵士に囲まれた。「銃は持っているか？」と聞かれた。それから沢山子どものいるところで台の上に立たされ、兵士に殴りたおされた。その後移送された憲兵隊では、16 人が 1 部屋に入れられた。3 か月後、大やけどを負った飛行士が 2 名来た。ひどい臭いがしていた。そのうち 1 人が、「臭くてすみません」とそんな状態なのに、私を気遣ってくれた。やがてだんだん口数が少なくなり、彼は死んでしまった。

２）ウィリアム・コネル（William Connell）

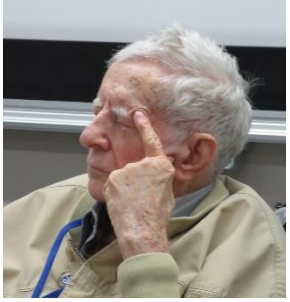
1943 年アイオワ大学を卒業した。大学では飛行士の勉強をし、代行パイロットになった。ボニン・アイランド（小笠原諸島）の父島の無線施設を破壊する任務を受けて、父島上空を飛んでいる時、貨物船 2 隻を見かけた。急に爆発音を聞き、気がついたら自分の飛行機が真っ二つに割れていた。パラシュートで脱出したが、着地してすぐ捕まり木に縛りつけられた。それから日本軍のサイドカーに乗せられ、護送された。島のトンネルの上から、民間人が沢山見ていた。8 日間島にいて、それから東京に送られた。海軍の収容所（大船）に 9 か月、60 人ぐらいの捕虜と一緒にいた。そのうち 17 人が大森収容所に送られ、穴掘りをさせられた。160 ポンド（約 72 キロ）あった体重は、終戦時には 110 ポンド（約 50 キロ）に減ってしまった。その後も飛行士として飛び続けた。

３）チャールズ・ブラウン（Charles Brown）

私は国際理解を深めるためのプログラムに参加してここにいる。捕虜となって大船収容所にいた時にひどい扱いを受けた。その後“A Boy called H” （少年 H）というセノオ・カッパさんの本を読んだ。そこでようやく大船で起きたことの意味がよく分かった。あなた方も奨学金のあるコースで学んで、和解に関することを学んでほしい。

４）フィスク・ハンレー（Fiske Hanley）

私は原爆のおかげで助かった。私だけでなく、多くの人の命が助かった。1945 年下関で機雷投下のミッションに携わっていて、戦艦大和に撃ち落とされた。私はエンジンを担当していたが、4 つのエンジンと機体が炎上し、2 名は脱出したが、他の 9 名は死亡した。私も怪我をしていたが、捕まって民間人に殴り倒された。それから警察官（私より背が高かった）が植木に送ってくれた。そこで怪我の治療を受けた。ひどく出血してソファーが血だらけになったが、日本人医師はよくやってくれた。それから憲兵隊に送られた。憲兵隊ではひどい目にあった。若い人には今の平和な社会を受け継ぎ、頑張ってほしい。



５）スコット・ダウニング（Scott Downing）

テキサス州出身、1945 年 5 月第 29 回目の作戦任務に就いている時、千葉県に墜落した。戦後帰国したが、戦争犯罪の調査のために 1947 年日本に戻ってきた。すべての日本の方々の罪は、戦犯裁判で償われていると思っている。

＜質疑応答＞

笹本：ブラウンさんへ。妹尾河童の本『少年H』を読んで考えが変わったそうだが、どういう所がどう変わったのか？

ブラウン：どういう所で理解が深まったのかと言うと、大船での海軍の捕虜の扱いは、アメリカではあり得ないようなひどいものだった。しかしその本を読んで、日本では軍隊は厳しい待遇が当たり前であったことが分かった。少なくとも日本では思ったことを言うのは大変で、『少年H』に出てくる若者の言っていることは正しい。

西里：ハンレーさんへ。あなたは捕虜というステータスで扱われたのか、それとも戦争犯罪者として扱われたのか？

ハンレー：よい質問だ。B29 の飛行士はすべて特殊捕虜という扱いだった。普通の捕虜とは違い、戦争犯罪人としての扱いで、怪我や病気でもほとんど治療は受けられなかった。一緒に捕虜になった 29 名中、私一人だけが生きて帰ることができた。大森はひどいところだと思われているが、その前にいた憲兵隊よりはずっといい。東京憲兵隊に比べたら、大森収容所なんてカントリークラブ（保養施設）のようなものだ。今ここにいる 5 人のうち、3 人が憲兵隊の生き残りだ。もう憲兵隊が無くなって、皆さんのためにも良かったね。私の隣りにいるのは（青シャツの人物）大学教授で海兵隊の歴史家だ。硫黄島には 30 人の海兵隊捕虜がいた。今回は私のケアのために一緒に来てくれている。

コネル：第 2 次世界大戦は何十年も前に終わった。私は日本人に対し恨みは持っていない。日本人も我々と同じように戦い、勝利しようと思っていただけだ。もし当時の看守と会っても、和解しようと思う。皆さんは大きな局面に立った時、よく考え、どうすべきか、別な選択肢は無いかを考えて欲しい。二度と戦争をしないように。

学生：パール・ハーバーについて、新聞又はラジオで初めて知った時にどう思いましたか？その後兵士になったのはどういう気持ちからですか？

コネル：私はその時学生で、父の隣りに座っていた。父は新聞を読んでいた。開戦を知って、戦争は勝たなければならないと思った。しかし、今考えると、人を殺す権利が無いのに、人を殺すということはばかげている。やれと命令されたことをやったことで、日本人を恨んではいない。

学生：捕虜として原爆が広島、長崎に落とされたことをどう聞きましたか？

ダウニング：ある夜聞いたが、その頃は大森収容所にいた。次に気がついたら、収容所から日本人はいなくなっていた。

ハンレー：原爆を落とさなければ、ロシアが北海道に南下してくるだろう。原爆で 20 万人の人が殺されたが、30 万人以上の人が救われた。もし本土で戦争が続いていたら、何百万人のレベルで被害は

拡大したと思う。これで戦争が終わったということは良かった。憲兵隊には知的な将校が沢山いた。我々は尋問されたが、原爆のことは何も知らなかった。いい形で戦争を終えることができた。戦争が続いていたら、1945 年 11 月に 1500～2000 万人の男女子どもが殺されるということが起こっただろう。

学生：捕虜になった時どう思ったか。アメリカに帰れると思ったか、それとも日本で処刑されると思ったか？

ブラウン：墜落機から下りてゴムボートへ乗り移り、さらにゴムボートから脱出すると、腕を後ろで縛られて歩かされた。女性が木の下駄で殴ってきた。とても痛かった。尋問所ではライフルで脇の下を突かれた。外で座らされ、前かがみにされたので、斬首されると思った。この時、母が私の死に方を知らないでほしいと思った。

コネル：水上着陸して浮かんでいる時、肩に 38 口径の銃を持っていた。日本兵が近づく前に、こめかみを撃って自殺しようかと思った。その時、自殺はダメだと思い、銃をしまった。

司会：この元捕虜の方々の来日は、1995 年の村山内閣の時に始まった交換プログラムの一環で、元捕虜の人々を招待して和解を進めようとしているものである。本日はありがとうございました。

（記録：小宮まゆみ）